

やまぐちっ子学力向上だより

第 8 3 号 H29. 3. 1
山口県教育庁義務教育課

学校としての取組を振り返りましょう

～ 計画したことは確実に実行されましたか？ 予想したとおりの成果が見られましたか？ ～

今年度も、残り1ヶ月となりました。

この時期は、一年間の締めくくりをするとともに、来年度に向けた準備を進めていくことが大切です。さらに、年間2回の検証改善サイクルで考えると、4月の「Check（評価）」に向けて、これまでの取組を見直し、修正することも必要となります。

山口県教育委員会の取組については、「やまぐちっ子の学力を育む検証・改善委員会」において検証を行い、この1月に以下のような提言をいただきました。

【 やまぐちっ子の学力向上に向けて ～提言～ 】

1 学力向上に向けた学校の組織的な取組の一層の充実

- 山口県学力定着状況確認問題と学力分析支援ツールを引き続き活用し、全国学力・学習状況調査と合わせた年間2回の検証改善サイクルによる課題解決に向けた全校体制での取組を徹底させること
- 見通しと振り返りの充実、「主体的・対話的で深い学び」の過程の計画的な実施、板書型指導案や授業評価の活用、小学校の教科担任制の実施等、組織的な授業改善に向けた取組の一層の充実を促進すること

2 教員の授業力のさらなる向上

- 研修会等の開催により、キャリアステージに応じた個々の教員の指導力向上を図ること
- 校内のミドルリーダーや学力向上推進リーダー・推進教員等を活用した日常的、組織的な授業改善の取組の活性化を促進すること
- 既存の授業改善資料の活用や、研究指定校、やまぐち総合教育支援センターとの連携等により、継続課題の解決に向けた指導方法の研究を推進するとともに、成果の普及に努めること



3 学力定着・向上と継続的な学力課題の解決に向けた学習環境の整備

- 合同研修会や乗り入れ指導、研修会への相互参加により、幼保小連携・小中連携・中高連携の一層の充実を促進すること
- 少人数指導や補充学習の計画的な実施、個に応じたきめ細かな学習支援を徹底する体制づくりを推進すること

4 「社会に開かれた教育課程」を見据えた、家庭・地域との連携・協働の推進

- 家庭との情報共有により学習習慣の確立を図る取組を促進すること
- コミュニティ・スクールや地域協育ネットの仕組みを生かし、地域の人材や歴史、伝統文化、産業等、地域の教育資源の積極的な活用を推進すること
- 情報発信の工夫により、教育施策や学校の効果的な取組の周知・普及に努めること



各学校において自校の取組を振り返る際にも、この提言を参考にしながら、項目ごとに取組を検証し、成果と課題をまとめ、来年度に向けて動き始めましょう。

取組を検証する際には、次のような点にも注目するとよいでしょう。



① それぞれの役割を十分に果たすことができていましたか

成果を上げている学校を訪問すると、先生方それぞれが、任せられた役割を自覚し、確実に責任を果たしている様子が見えます。

それぞれの先生方には、校務分掌等による役割とともに、例えば、経験豊かな先生方が、日常生活の様々な場面で、同僚の若手の先生にアドバイスをするなど、学校で置かれている立場に応じた役割が求められます。それぞれの先生が、求められている役割を果たしていくことが、学校の力をより強いものにしていくはずですよ。

もちろん、学校という組織そのものについても、社会から求められている役割を果たしているかを検証することが必要です。「社会に開かれた教育課程」の重要性が注目される時代だからこそ、社会の中の学校として、学校にしかできないこと、学校だからできることを大切にしたいものです。

② 情報を共有し、連携・協働を図ることができていましたか

社会は激しく変化しており、学校という限られた組織だけで児童生徒を育成することは難しくなっています。これからの学校は、学校以外の様々な人や組織等と連携・協働を図っていくことが不可欠です。

様々な人や組織等と連携・協働を図っていくためには、相手を知るとともに、相手に知ってもらうことが重要です。情報のやりとりを続けていくうちに見えてきた互いの得意分野を生かし、苦手分野を補いながら、児童生徒に確かな力を育てていくことが求められます。



もちろん、校内における連携・協働も大切です。必要に応じて、学級、学年、教科などの枠を超えた取組を進めていきましょう。そこでも、鍵を握るのは「情報の共有」です。例えば、先生方が互いの思いや願いを交流させる場を設定することで、校内の連携・協働を円滑に進めることができるようになります。

③ 常によりよい姿を求めて、取組を更新することができていましたか

一度始めた取組は、一定の成果を確認することができるまで継続することが大切です。しかし、一つの取組だけにこだわり過ぎると、取組を実施することだけが目的となってしまう、児童生徒のありのままの姿が見えなくなってしまう恐れがあります。

成果を上げている学校では、よい取組について基本的な枠組みは維持しつつ、具体的な方法等に関しては、実情に応じて更新を図っています。他校の好事例等からも情報を収集しながら、目の前の児童生徒にとってよりよい取組を模索する姿勢を大切にしているということが分かります。動き続ける組織こそ、成長することができる組織だと言えるでしょう。

もちろん、毎年、全てを変えることがよいわけではありません。どの部分は変えるべきか、どの部分は変えずに維持すべきか、見極める力が求められます。

学校では、毎年、年度末から年度初めに、メンバーチェンジが行われます。先生方が変わっても、児童生徒が変わっても、県内全ての学校において、児童生徒に生きる力を育む働きかけが行われる必要があります。年度末の大きな行事が続き、忙しい毎日が続きますが、新年度の円滑なスタートのために、学校の方向付けと、エネルギーを貯める充実した1ヶ月にしていきましょう。